

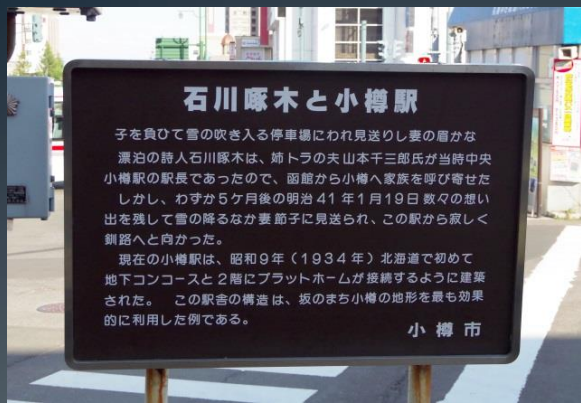
後志文学 ツーリズム 〈小樽市内編〉

後志には、文学がある。

後志を舞台にした文学は、実はたくさんあります。誰もが知っているあの作品から、ちょっと意外なあの作品も……。文学の舞台を訪ね歩くと、その地の歴史や文化が見えてきます。

今回は、ちょっと違った視点から後志を旅してみませんか。

いしかわ たくぼく 石川 啄木



①小樽駅前「石川啄木と小樽駅」看板

やがて、啄木一家は花園町にある南部煎餅屋、西澤善太郎方（現：た志満）の2階に間借りします。

た志満の店頭の一部に、石川啄木居住の地、と書かれた記念コーナーがありました。

「今日かわたれ時の薄暗がり時、駅夫に牽かせたる大八車を先立てて中央停車場の駅長官舎をでて、ここ名も優に美しき花園町の南部煎餅売の店に移り住みたる男女4人有之候、四人の一人は小生にて、あとは母と節子と可愛き京ちゃんに候、室は二階二間、六畳と四畳半にて何れも床の間あり思いしよりは心地よく候・・・」

と知人に書き送っています。



②石川啄木 居住の地 跡（現：た志満）



③小樽日報社跡（現：本間内科医院）

「かの年のかの新聞の 初雪の記事を書きしは 我なりしかな」

啄木が小樽日報で働いたのは3ヶ月弱。せっかく妻子の元にやってきたのに、また職なしの身に。さぞ心細い年末年始であったことでしょう。

「来らずともよかるべき大晦日は遂に来れり。多事を極めたる丁未の年は茲（ここ）に尽きむとす。然も惨憺たる苦心のうちに尽きむとす。此処北海の浜、雪深く風寒し。何が故に此処迄はさすらい来し。」

「門松も立てなければ、注連飾もしない。薩張（さっぱり）正月らしくないが、お雑煮だけは家内一緒に喰べた。」

「職を失うて、屠蘇一合買う余裕も無いと云う、頗る正月らしくない有様で迎えようとは、抑々如何なる唐変木の編んだ運命記に書かれてあったことやら。」（当時の日記より）

放浪の詩人、石川啄木が、小樽にも住んでいたことはご存じでしょうか。函館の印象が強い啄木ですが、実は小樽にもほんの少しのあいだ、住んでいたのです。

函館で教鞭をとっていた啄木でしたが、大火に追われ、明治40年の9月中ばに札幌へ渡ります。そこで北門新報社の校正係となりますが、9月末にはそこを退社して、小樽に渡りました。先に母や妻子を預けていた、当時小樽中央駅（現小樽駅）の駅長だった姉の夫、山本千三郎氏を頼ってのことでした。

その日の日記には、「姉が家に入れば母あり妻子あり妹あり、京子の顔を見て、札幌をも函館をも忘れはてて楽しく晚餐を認めたり」とあります。久々の一家団欒に、啄木の顔もほころんだことでしょう。

啄木は、10月に創刊する小樽日報社の記者となり、発刊に携わっています。同僚には、童謡「シャボン玉」や「赤い靴」等の作詞で有名な野口雨情がいました。しかし、主筆 岩泉江東と対立し、雨情はわずか十数日で小樽を去って行きます。

やはり主筆と対立していた啄木も、12月12日に小樽日報社を退社。翌年1月に小樽を去って行くのでした。

小樽日報社跡（現：本間内科医院）は、静屋通り（長崎屋裏、国道5号より一本海側の通り）にあり、案内板が立っています。



啄木は、小樽日報社の社長のはからいで、釧路新聞社に入社することとなりました。一家団欒のひとつきもつかの間、明治41年1月19日、小樽駅を発つことになります。

駅の右手の階段を上がっていくと、三角市場の手前に啄木の歌碑があります。

「子を負ひて 雪の吹き入る停車場に われ見送りし 妻の眉かな」

雪の中、幼子を背負いながら見送りに来た妻は、きっと不安げな表情を浮かべていたことでしょう。

「予は何となく小樽を去りたくない様な心地になった。小樽を去りたくないのではない、家族と離れたくないのだ。」（当時の日記より）

妻子を残し、後ろ髪をひかれるように旅立っていく啄木の様子が、よく伝わってくる歌です。

④石川啄木 歌碑（小樽駅横、三角市場前）

ところで、小樽といえば、啄木のこの歌を思い浮かべる人もいらっしゃるのではないのでしょうか。

「かなしきは 小樽の町よ
歌ふことなき人人の 聲（こえ）の荒さよ」

この歌碑は、水天宮にあります。

一見すると小樽を軽蔑しているかのようにも受け取れるこの歌ですが、碑の裏には、このように書かれています。

「・・・啄木は『小樽に来て初めて植民地精神に溢れた男らしい活動を見た。小樽の人は歩くのではない、突貫するのである。朝から晩まで突貫する小樽人こそ明日の日本をつくる気魄がある』と礼讃した。その印象を追想した碑の歌には厳寒の新天地に夢と希望を抱き、たくましく働いた人々の哀歓が端的に表われている」

とあります。啄木は、エネルギーに満ちあふれた小樽の人々のたくましさに、賛辞を贈ったのです。



⑤石川啄木歌碑（水天宮境内）

道草とりっぴ

ここまで来たら、足を伸ばして・・・



水天宮

大正8年、市内の多くの社寺を手がけた伊久治三郎によって建てられました。本殿、中殿、拝殿が連結する形式の権現造りで、屋根は銅板葺きです。港を見下ろせる高台に立っており、晴れた日の景色は抜群です。



小樽聖公堂

明治41年建設。
ニッカウキスキーの創業者、竹鶴政孝の妻、リタが礼拝に訪れていた教会です。
宣教師アン・ステープリーとお茶を飲みながら英語で会話を楽しんでいました。
水天宮を花園町側を下りていくと、鳥居の手前にあります。

こばやし たきじ いたう せい
小林多喜二・伊藤 整



⑥小林多喜二 住居跡（小樽築港駅バス停近く）

啄木が小樽に降り立った明治40年、同じく親戚を頼ってこの地にやってきた一家がありました。秋田県大館市の北方、貧農の次男だった小林多喜二とその父、母、姉と妹の一家です。小樽でパン屋をしていた伯父を頼り、一家そろって小樽・若竹町へと入ります。当時の住居跡は、今の小樽築港駅のバス停そばにあります。家の裏手は築港の工事現場で働く土工夫たちのタコ部屋でした。多喜二は労働者たちの過酷な環境を間近に見て育ちます。

よいとまけと多喜二？

ここでプチトリビアを。多喜二一家が頼った伯父、小林慶義は、あの「よいとまけ」で有名な三星の創業者なのです。慶義は、小樽で「小林三星堂」を起こし、さらに王子製紙が操業を始めた苫小牧に商機を見出して苫小牧店を開店。それがいまの「三星」となったのです。

多喜二は伯父の援助を受けながら、小樽商業（現：小樽商業高校）、小樽高商（現：小樽商大）へと通います。その一級下には、伊藤整がいました。

伊藤整は「若い詩人の肖像」という自伝的小説を書いており、その中で多喜二について触れています。整にとって、一級上の文学青年であった多喜二には一目置いており、図書館で借りた本に多喜二の名前を見つけたときの気分を、こう描いています。

「しかし、あいつが読んだ後では、私は自分の読んでいる本の本当の中身がもう抜き取られているような気がした。」（「若い詩人の肖像」）



⑦小樽商科大学（小樽高商時代、小林多喜二、伊藤整が通った）

小林多喜二も伊藤整も、「地獄坂」と呼ばれるこの坂を、歩いて登りました。

「海沿いに長く伸びた小樽市の背後を囲んでいる山の中腹まで、かなり急な坂を二十分ほど登ったところの左手に校門があった。（中略）学校内にある寄宿舎にいる生徒をのぞけば、半分以上の生徒達は、毎朝下の街の寄宿舎から、または下宿屋や自宅から、二十分あまりかかる長い坂をのぼって、登校した。」（「若い詩人の肖像」）

今の商大生は、小樽駅からタクシーに相乗りして通学しているのだとか。時代の流れを感じますね。



⑧地獄坂（小樽商大へ向かう坂）

さて、多喜二は小樽高商を卒業したあと、北海道拓殖銀行に就職しました。現在は似鳥美術館になっているこの建物は、大正12年築の鉄筋コンクリート造りで、北のウォール街の交差点を飾っています。

「五時を過ぎると、ビルディング街は、いろいろな建物の口から溢れた人で一杯になった。それらの人たちはその街路から、一街路ずつ階段形に高まっている通りを幾つも横切って山の手の方へ登って行った。浜人足や工場の労働者たちは港町通りを、街の両端の方へ帰って行った」（「転形期の人々」）



⑨旧 北海道拓殖銀行小樽支店（現：似鳥美術館）



⑩旧磯野倉庫（元「海猫屋」店舗）

多喜二は自家の困窮した状況や、当時の深刻な不況から来る社会不安から、労働運動に参加するようになります。昭和4年、代表作「蟹工船」を発表。一躍プロレタリア文学作家として注目を集め、同時に特高警察からもマークされるようになりました。そして同年、不在地主であった磯野農場の小作争議に深く関わり、その経験から「不在地主」を書きます。

題材となった磯野農場の倉庫であった「旧磯野倉庫」は、村松友視の「海猫屋の客」の舞台にもなり、平成28年に惜しまれつつも閉店したレストラン「海猫屋」の店舗として、市民をはじめ、観光客や多くの著名人に長く愛されてきました。

現在は、新たな飲食店となっているようです（平成30年1月11日オープン）。小樽や道内の食材を使ったまき焼き料理が特徴だとか。

翌月12月、「工場細胞」を起稿。舞台となったのは「北海製罐小樽工場」でした。

「『H・S製罐会社』は運河に臨んでいた。Y港の西寄りには鉄道省の埋立地になって居り、その一帯に運河が鑿（ほ）られている。運河の水は油や煤煙を浮かべたまゝ濁っていた。（中略）『H・S工場』はその一角に超弩級艦のような灰色の図体を据えていた。それは全く軍艦を思わせた。艦は製品倉庫から運河の岸壁でそのまゝ荷役が出来るようになっていた。」



⑪北海製罐小樽工場（「工場細胞」の舞台）

その活動により拓銀を解雇された多喜二は翌年上京。地下活動に入ります。昭和8年2月20日、多喜二は特高警察に逮捕され、築地署内で拷問を受けた末、亡くなりました。

旭展望台へと向かう自然道を歩くと、小林多喜二の文学碑があります。木漏れ日に照らされながら、静かに小樽市街を見下ろすこの碑は、札幌出身の彫刻家、本郷新の手によるもの。本を開いた形にデザインされており、漁業労働者のたくましい顔の彫刻と、多喜二が獄中から知人に送った手紙の一部が記されています。ふるさと小樽への、彼の深い愛情が感じられます。



⑫小林多喜二 文学碑



木の階段を上っていきます。気持ちのいい風が吹く、静かな場所でした。



冬が近くなると
ぼくはそのなつかし
い国のことを考えて
深い感動に扱えら
れている。そこには
運河と倉庫と税関と
棧橋がある。そこで
は、人は重く苦しい
空の下を、どれも背
をまげて歩いている
ぼくは何処を歩いて
いようか、どの人を
も知っている。赤い
断層を処々に見せて
いる階段のように山
にせり上っている街
を、ぼくはどんなに
愛しているか分らな
い



13 小樽文学館

小林多喜二や伊藤整の資料は、小樽文学館（小樽市色内1-9-5）に多数保存されてあります。

多喜二のデスマスク、母セキをはじめとする知人達が、多喜二の遺体を取り囲む写真や、息子の死を悼む母セキの自筆文章など、拷問の残虐さを物語る資料もあります。

小林多喜二と伊藤整が小樽高商で一緒にフランス語劇を演じたときの写真もありました。

伊藤整は、塩谷から汽車通学で小樽中学（現：小樽潮陵高校）、小樽高商（現：小樽商大）に通いますが、その車窓を再現したコーナーもありました。生涯を通じての親友、川崎昇や、恋人となる女学生と知り合ったのも、この汽車の中。車内を模した空間に腰掛けて、若き日の伊藤整になりきってみるのはいかが。

彼の書斎を再現したコーナーもありました。文字通り、書に囲まれた雑然とした空間。くしゃくしゃと原稿用紙を丸めて放り投げる文豪の姿が、目に浮かびます。



14 手宮公園 緑化植物園からの眺め

さて、もう少し北へ行ってみましょう。桜の名所で、北限の栗林がある手宮公園。

若き日の伊藤整が、汽車通学で出会った女学生と違いびきを重ねていた場所です。緑化植物園にある小高い丘からは海が見渡せます。当時の立派な高架栈橋を眺めながら、二人は何を語り合っていたのでしょうか。

「小樽の北はずれの公園でしばしば逢った。そこは赤土の崖がむき出しになっている人気のないグラウンドがあり、すぐ裏は雑木林や林になっていた。その赤土の崖の下が港の北隅になっていて、そこに石炭積み込みの高架栈橋があり、石炭を積みとる汽船が、少し傾いて腹をふくらまし、その栈橋によりかかっているのが、上から見下された。私たちは何時間もそこで、一株の灌木のそばに座って、日に照らされて気が遠くなるほど、その栈橋と汽船を眺めていた。」

（「若い詩人の肖像」より）



15 伊藤整文学碑

少し郊外へ出てみましょう。塩谷のゴロダの丘と呼ばれる高台に、伊藤整の文学碑があります。地元で採った安山岩で出来ているというこの碑は、どっかりと腰を据えて塩谷の海を見下ろしていました。刻まれた詩は、彼の詩集「冬夜」に収められた「海の捨児」から。

海の捨児

私は波の音を守唄にして眠る
騒がしく絶間なく
繰り返して語る灰色の年老いた浪
私は涙も涸れた悽愴なその物語りを
つぎつぎに聞かされてみて眠ってしまふ
私は白く崩れる波の穂を越えて
漂ってゐる捨児だ
私の眺める空には
赤い夕映雲が流れてゆき
そのあとへ星くづが一面に撒きちらされる
あゝこの美しい空の下で
海は私を揺り上げ揺り下げて
休むときもない



ゴロダの丘からは塩谷の海が見えます。

あさくら

朝倉かすみ 「タイム屋文庫」

塩谷の海を見下ろすこの丘は、朝倉かすみ著「タイム屋文庫」でも印象的なシーンとして使われています。朝倉かすみは小樽出身の作家で、代表作に「コマドリさんのこと」（北海道新聞文学賞）、「田村はまだか」（吉川英治文学新人賞）などがあります。「タイム屋文庫」は、小樽を舞台にした連作短編集です。



「ゴロダの丘というらしい。柎子と樋渡徹がいま立っている場所だ。塩谷にある。膝まで届かないほどの低いベンチが海側に三脚ある。向かい合っても三脚あった。あいだを通り、奥まって、伊藤整の文学碑が建っている。丘のしたには、かれの生家があったと樋渡徹がいった。」



「あいつの家は取り壊された」
すぐくいてみたかったんだけどな、と、樋渡徹は海に目を向けた。海の手前に自動車の販売店がある。湾に沿った国道5号線にひらべったく店をかまえているのが見える。
「すぐくいてみたいところがあるって、いいだろ？」
いまは跡形もない「そこ」が目と鼻の先にあるって感じ、よくないか？と、海を見たまま樋渡徹は言った。」



かつての「文学の舞台」が、時を経て現在の「文学の舞台」になる。先に挙げた「旧磯野倉庫」もそうですが、小樽には時代を超えて、文学の舞台となっている場所がいくつかあります。
それはそこに、過去も現在も未来も生き続ける、変わらないものがあるから。いくつもの物語を生み、それによってまた、息づいていく小樽の街。今この瞬間にも、新たな物語が生まれているのかもしれない。

「小樽は坂のまちだ。道中、けわしい坂はなかったが、あがったりおりたりして歩いていって、柊子は洗心橋という橋のたもとまでやってきた。ふっくらとした、このなだらかな登り坂をあがりきったら、祖母の家がある。」

このお話は、主人公、柊子が小樽にある、今は亡き祖母の家で、タイムトラベルの本だけを扱った本屋さんを開いたことから始まります。

小樽を舞台としたこの小説には、「ゴロダの丘」や「洗心橋」をはじめ、札幌から小樽に向かう国道五号の描写や、あられ・煎餅の「みどりや」など、小樽市民になじみ深い場所がたくさん出てきます。

「太い道路もいくつもの小路も、坂というほどの坂ではないが、なんとなく傾いている。古い家はめっぽう古く、新しい家はめっぽう新しい限界である。天ぷら舗装の道路はたいらではなく、だから柊子は海に向かってのびていく龍の舌のうえに立っている気にふとなった。」

海に向かってのびていく坂が多いのが小樽の特徴。「龍の舌のうえに立っている」とはまるで神話のような、面白い表現です。



にしむら きょうたろう

西村京太郎「小樽 北の墓標」



17 小樽運河



なんだか少し懐かしい、「みどりや」のおかし。



16 洗心橋（小樽市緑町付近）



洗心橋は天神町方面、天狗山、塩谷方面からそれぞれ集まってくる道の集合点にあり、海沿いに延びる小樽市の「おへそ」ともいえる場所にあります。

その下をくぐっているのは、天狗山から流れる於古発（おこばち）川。

なんということのない三叉路ではありますが、ふと見ると古い趣ある家があたりして、ここが「タイム屋文庫」だったら・・・などと想像するのも楽しいかもしれません。

最後は、「小樽といえば」の場所に絡んだミステリーを紹介しましょう。西川京太郎著「小樽 北の墓標」です。ご存じ十津川警部が、港町小樽を舞台に繰り広げる推理劇。十津川警部の先輩刑事であった木村の父が運河で不審な死を遂げたことから、疑いがかかる人物への木村の復讐が始まります。「運河保存運動」も絡み、物語はさらに意外な方向へ・・・。

その昔、保存か埋め立てかで大きく揺れたこの場所も、今は観光客があふれる、小樽を代表するスポットとなりました。散策する人、カメラを構える人、クルーズ船でたゆたう人・・・カモメの鳴き声を聞きながら、ぼんやり眺めていると、時を忘れてしまいそうです。

小樽市内文学散歩 地図



小樽市街地拡大図

※上下地図とも出典：国土地理院HP
地理院タイル「電子国土基本図」を加工して作成



まさに小樽散歩は文学散歩。作品を読んだあとに歩くと、また違った景色に見えてくるから不思議です。明治、大正、昭和と、長い歴史の面影を色濃く残したこの町だからこそ、遠い時代にも思いをはせることができるのでしょう。商人の活気に溢れていた頃、戦前の緊迫した空気に包まれていた頃。やがてそれも幻影となり、時を刻むほどに味わい深い町へと変化していきました。文学を訪ねて、その町の歴史や表情を知る。・・・そんな旅は、いかがでしょうか。

〈参考文献〉「海猫屋の客」 村松友視 著 朝日文庫／「小樽 北の墓標」 西村京太郎 著 毎日新聞社／「タイム屋文庫」 朝倉かすみ 著 マガジンハウス／「北海道文学全集 第二巻 漂泊のエレジー (株)立風書房／「北海道文学全集 第六巻 抵抗と闘争」 (株)立風書房／「北海道文学全集 第十三巻 青春回帰」 (株)立風書房／「北海道文学ドライブ 第一巻 道央編」 木原直彦 著 イベント工学研究所 (50音順)

〈協力〉市立小樽文学館 玉川館長